北野文書 ④「おさしづ」の写し翻刻

おやさと研究所員
安井　幹夫　*Mikio Yasui*

（10）　明治廿四年五月九日　夜十一時半　刻限
　さあ〳〵一寸刻限にしらすで〳〵　とふゆふ事しらすなら　ねんぶんのとしをしらす〳〵」（19 オ）
これからめづらし事をゆいかける　さあ〳〵これまで〳〵年といふ　ながい年限の内ゆふ事もミる　いかなる道もとふしきた　はやくかきとれ〳〵　さあ〳〵道といふ道が世界といふ　これから〳〵どふゆふ事も一日〳〵しらす　はやくしらさにやならん　いそいでしらさにやならん」（19 ウ）
しんじづはなしする事でけん　たづね〳〵身の処を尋る　どんなはなし　日々の処ちよい〳〵との処しらす　身の内がさわる　どふもならん　一日をくれ　又をくれ　だん〳〵おくれる　身の内すみやかなれバ　何時でもはこぶ　さわりあつてハいりこんでさとす事ハできん　席といふ」（20 オ）
事情きゝわけ　なんでもないとをもふている　是迄自由用といふりハいく〻にもといてある　なれときゝよ　とりよふでどんなりをきいてもしやん〳〵　しやんたけでハとふもならん　是迄といてきたる道　あぶなき道もたのもし道もといてある　あふなき道がたのもしい　たのもしい道があふな」（20 ウ）
い　むつかしい中にたのしミなけりやなろまい　是迄の道ハさしづのりをもつて　つれてとふりたから　とふれた　なれとめん〳〵の心のりで　とふるならとふりてミよ　又一ツとふくよりはこんで事情　席〳〵といふてはじめかけた事情　内々一ツ事情ハあろまい　世上どんな事ゆいかけ」（21 オ）
るとも　をめをそれハない　さとしたる道ハとふらにやならん　つれてとふるからとふれる　どれだけとふくといへど自由用といふ道ハ十分つけてある　年がよつてよわつてくるとゆふ中にハたいせつや〳〵と事情ハゆわにやなろまい　大切の事情がわからん　〻よ〻ぐわといふりだけで　をも」（21 ウ）
ふよふにならん　おもふよふにさとされん　毎日日々事情がちかよる　どんな道がはじまるとも　何時はつしるともわからん　身上の処　又さわり〳〵わからん〳〵で身上もわからん　このはなしはやくさとしたい　なれどじやまになるものがあつて　どふもならん　はこぶちからの」（22 オ）
りがなひからどふもならん　何時世上に一ツのりがあるともわからんから　だんじのはなしつたへてくれるよふ　内々にもいかなるもたんのふ　はやくをさめにやなろまい　へんじよの処　はあといふしやんわかろまい　そこで刻限事情をもつてさとしをくといふ」（22 ウ）

（11）仝月廿五日夜　午後十一時廿五分　刻限
　さあ〳〵　やれ〳〵　さあ〳〵なにがゆいかけるやらわからん　さあ〳〵〻らひ道がでかけた　さあ一寸ならなにもしらん　しらんものがなんにもしらん　さあ〳〵なにをはじめるともわからん　さあ〳〵是迄とふりきたる道　どふなりこふなり世界のはしくれ　あちらの」（23 オ）
木がゆら〳〵　こちらの木がゆら〳〵　なんにもわからん　しらせんものがではいりしていた　一寸事情　一寸のとばしりがでかけた　このものあのもの一寸とばしり　とこまでもうろ〳〵　あちらへうろ〳〵している　どんな事がはじめるやら　こんな事をろかな事　どんな事がはじめるやら　こんな事」（23 ウ）
をろかなもの　ほんのさわり　どんな風ふくやら　こんな風ふくやら　神なら神だけとばしりだけの事　さあ〳〵道をはじめかけたら　をい〳〵道がはじまる　いつもはるハはるのよふにをもふていてハ　ころりとちがう　いつでもはなのさくよふに　おもふているから　わからせん　どこから　どんな」（24 オ）
風ふくやら　どんな風あたるやら　さあどんな風ふくやら　あめがふるやらしれやせん　なんのたのしミもありやせん　一寸とばしりもかゝる　これがわからん　花の咲しゆん　なんぼどふしたて　しゆんがこにやさきわせん　風がふく　あめとてんきと　まつけれど　大風だけハどんなものでも風またん　あふなき道」（24 ウ）
があるから　ちやんときかしてある　どんな事みるやらきくやら　あんじるばかりいる　又一ツのはなししてきかす　なにをいふても　みな道〳〵のはなし　それ〳〵どふもとばしりだけでもおどろく　何時どんな事ミるやら　きくやらわからせん　内々だけの心へだけの事情あるやろ　どんだけ心も」（25 オ）
つたて　どこにきかすのやなひ　ゆうのやなひ　これをちやんと　とゞめてをかにやならん　ちやんときいておけ
（注）正しい日付は、明治 24 年 5 月 15 日午後 11 時 25 分である。

（12）明治廿四年五月十六日午前九時　本席身上御障り二付御願
　さあ〳〵つゝいてはなしかけたる事がある　どふゆふ事をはなし　是迄きいたる事やきいて」（25 ウ）
ありても刻限にはづれるやなひ　ミなをくれるのや　第一のりをはなしたる　刻限のりにはなしたる事ハ　はつれるのやなひ　をくれるのや　第一事情ミなほのかのりになる　刻限の咄し　めん〳〵のをもいにわすれる　そこでをくれてどふもならん　今の處ハ二ツある　一ツの道ハをも」（26 オ）
ての道　一ツの道ハ心の道や　をもての道一寸の道や　心の道ハちがわしてどんならん　わからんから　みなミゆるしてある事を　どんな事でもあつたやらなあ　みゆるしてあるからをくれてどんならん　むねの道あれバこそ　是迄とふりてきてある　これをよふきいてをかねバならん　世上の道と」（26 ウ）
いふものハ　とんとたよりにならん　しいかりしたよふで　ふわ〳〵してある　世界の道にちからをいれると　むねの道をうすくなる　ほんのわからん　世界の道にちからいれてハなにもならん　そこでミんなもどりたら　このりをミなきかしてをかねバならん　世界の道に心をよせたらどふもならん　むね」（27 オ）
の道ハ神の道やで　一ツに心をよせておかねバならん　是迄刻限はなしといへば　なにやはやりうたのよふにをもて　あちらへこちらへゆうたぶに　是迄刻限はなしとゆうたらなにやいな　ゆふてしもてある　つい月日がたてばわすれて　なにやいな〳〵とゆふてしもてある　それでハどんならん」（27 ウ）
で　これむねの道が第一やで　しいかりきいてをかねバならん　大事の刻限の道やで